

「当たり前」に感謝

読谷中学校 一年四組 知花 心愛

戦後七十六年がたった今。私は、今年初めて祖父の戦争体験を直接聞きました。私の祖父が戦争体験者だということは知っていました。しかし、「祖父は思い出したくないことかもしれない」、「人に話したくないことかもしれない」と思うと、戦争のことについて祖父に尋ねる勇気が持てなくて、ずっと聞くことができませんでした。

これまでの平和学習で見してきた戦争の写真の中で、忘れられない一枚があります。荒れ果てた地面に、何人もの人がバタバタと倒れて死んでいる写真です。足が折れ曲がっている人。頭から血を流している人。その様子から、もう死んでいることは明らかなのです。それなのに、その死体のそばで立っている男の人。死んでいる人に銃口を向けていました。本当にこんなことが起こっていたのか、と私は大きな衝撃を受けました。この写真が

戦争の本当の姿を写し出したように思えてきて、戦争というものが今まで以上に怖くなりました。写真でも十分怖いのに、それを生で見たらどうなってしまうだろう。祖父はこの写真の光景を直接見てきた、直に体験したのだと改めて気づいたとき、聞くのが怖いけれど、私が今、祖父の話を知ることが出来なければならぬ。私がいかに生きていかなければならぬかを向けて続ける戦争で本当にあったことは、私がしっかりと語りついでいかなければならぬと感じたからです。祖父はいつもよりしっかりと口調で、戦争のことについて私に話してくれました。祖父にも私に伝えておかなければならないという思いがあったからでしょう。戦争が起こったとき、祖父は私と同じ十三歳だったそうです。学校の校長先生や同級生と一緒に避難所を目指し、地元の喜名から山原まで逃げたそうです。祖父は、逃げるとき、米軍につかまり、ブタ小屋に収容されていました。十三歳の少年が家族と離れて

いるときに、敵につかまってしまったのです。敵につかまったうえに、ブタ小屋に収容されるなんて、きつと苦しかったに違いありません。ここで死ぬのなら、自分の故郷で死にたいと思っただけです。祖父は、友達と兵で貝を取っているときに、隙を見て泳いで逃げたと話しました。捕まるかもしれない、殺されるかもしれない、帰ってきても家族はもう生きていないかもしれない、いろいろな思いを抱えたでしょう。祖父は無事、家族の元へ帰ることができました。あんな恐ろしい光景を目の前にして、ブタ小屋に収容されて、みなさんは生きる希望や生きている喜びを持てますか。私なら生きていることが辛くなると思います。そんな状況の中でも祖父は生きぬいた。逃げきれたこと。これは奇跡だと思いません。今では考えられないようなこと、信じられない光景が、当時は日常だったというところが戦争を決してしてはいけない理由だと思えました。

そのような中、生き抜いた人がいる。私の祖父もその一人であること。これはとてもすごいことだと思ふし、あんな状況の中を生き抜いた祖父がとても誇らしく思えました。それと同時に、「あの時生きていてくれてありがとう。」という感謝の気持ちで沸き上がってききました。今、私たちが毎日の日々の中で、「今日は何を食べよう。」「明日は何をしよう。」と考えられることは、当たり前ではないということに気づきました。今日を生きること

必死。明日生きていくかさえも分からない。そんな状況の中を毎日過ごしていたあの時代。そう考えると、私たちが当たり前と思つて過ごしている日常には何一つ当たり前なことなんてないのです。私たちが当たり前と思つていくこと、当たり前前と思える生活に感謝しようと思ひました。そして、この祖父の話を大切にしてくれから伝えていきたいです。来年の慰霊の日も祖父から話を聞きたいと思ひました。みなさんも今の当たり前前に感謝を

